

タイトル	アウグスト・ベーク『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』：翻訳・註解(その4)
著者	安酸，敏眞
引用	北海学園大学人文論集，43：27-51
発行日	2009-07-31

アウグスト・ベーク
『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』
—— 翻訳・註解（その4）——

安 酸 敏 眞

III. 個人的解釈 (Individuelle Interpretation)

§ 24. これまでわれわれは、言語をその客観的な意義にしたがって考察してきた。話し手は、自分に即自的に与えられている直観だけではなく、言語との多様な現実的諸関係において与えられている直観を表現する。話し手はそれゆえ言語そのものの一つの器官である。しかし言語は同時に話し手の器官でもある。なぜなら、話し手が表現する直観は、同時に客観的世界についての話し手の理解に制約されており、そしていろいろな言葉の客観的意義は、話し手がみずからの本性を、みずからの内面の経過と状態を、つまりみずからの主観性を表現へともたらすような仕方で、それらの言葉を選択し編成することを妨げはしないからである。そのように語りのなかにはまず話し手の主観的本質が、すなわち話し手の個性 (Individualität) が反映されている。言葉の意義をこの側面から理解することは、個人的解釈の課題である。かなり多くの場合に、この課題は、話し手が他者を話者として導入することによって、二重化される。このことはあらゆる語りのジャンルで起こるが、しかし演劇的な表現において特有の文体形式 (Stilform) になる。歴史家においては歴史的人物の語りは文字どおり引証され得るので、ひとはそうした語りを純粹に歴史的人物の個性から解明しなければならない。これに対して演劇においては、行為する人物の性格の背後に、相変わず作家自身の個性が潜んでおり、それはあるときにはより強く、あるときにはより弱く、浮かび上がってくる。

個人的解釈は、ひとが話し手の発言を考察する前に、話し手があらゆる

対象をどのように直観するかがわかるほど、話し手の個性を完全に追構成(nachconstruieren)することができるときに、完全なものになるであろう。そのときには、話し手がどのような場合であれ言うに違いないことを、ひとは規定することができるであろう。それにもかかわらず、ひとは話し手を、とくに古代語の作品においては、たいていはその語りそのものからしか正確には知ることができないので、解釈の業務は、そこから話し手の個性を見いだすために、彼の語りを分析するところに存する。それゆえここには、解釈学的技術によって回避すべき、明白な課題の循環が存在している。

真っ先に問われるのは、個性がどこに存しているかということと、言語におけるその表現はいかなるものか、ということである。各々の人間は特有の思考方式と直観方式を有しているが、かかる方式はその人の精神力の独特な相互関係に、その素質に、そしてもしひとが究極的原因にまで遡るとすれば、身体と精神との関係に基づいている。これこそがその人の個性である。個性はその人の存在のあらゆる状態において開示され、いたるところで同一である。その人の本質の最も多様な諸々の表現においても、つまり言葉や行為やあらゆる感受においても、個性はあくまでも同一である。個性はあらゆる個々の生命現象の普遍的な性格であり、人間本性の至聖所として侵し難いものである。しかしこの至聖所は外の世界に対して閉ざされてはいない。その普遍的な性格は、その作用が現れ出るさまざまな条件によって、多様な仕方で修正される。人間は一瞬たりとも同一ではない。あらゆる瞬間に、人間は部分的にはみずからが発展させ、部分的にはそとから受け取るところの、異なった観念の範囲を有している。個性はこの場合、その効力の範囲によって制約される。なぜならば、生のさまざまな状況は各個人の表象の範囲を規定し、そして嬉しい出来事や悲しい出来事はいろいろな表象にその個人的な方向性を与えるからである。さらにどの個性にもその歴史がある。その普遍的な性格は固有の発展によって制約される。身体は変化するものであり、われわれはまず胚種から始まってついに最盛期を迎え、そして徐々に衰えていくその発展の様を明確に目にす

るが、それと同じように魂も、その有限なる現象において、成長、最高の力、減退という周期を有しており、かかる周期は異なった肉体的・精神的組成によってさまざまである。ひとはさまざまな時代に、さまざまな雰囲気に応じて、さまざまな仕方で、いろいろな対象によって刺激される。対象そのものもまたたしかに変化する。それゆえ、ひとはまた同じものをもう一度生み出すことができない。かつて書いたことのある対象について、数年後にふたたび書いてみようを試みてもよい。自由な組み合わせが問題である限り、ひとは同じ思想をふたたび見出すことはできないであろう。つまり個性ないし直観の仕方は、客観的な語義すなわち直観そのものに完全に類比的である。個性は直観同様、同時に統一性としてまた多数性として現れ、そして後者の関係においては、適用の範囲と固有の歴史とによって制約されている。さて、語りにおける個性は——われわれがすでに注目したように——言語的要素の選択と合成とによって表現されるのであるから、これら二つの側面はこのような二重の関係において立ち現れざるを得ない。言語はそれによって統一的な個人的性格を獲得するが、かかる性格はそれにもかかわらず、その根底にある雰囲気に応じて、多様な仕方で修正されたかたちで現れる。個性のこのような言語的表現が、個人的な文体 (der individuelle Stil) である。さて、ここに文法的な語義と個人的な語義との本質的な相違が示されている。文法的な語義に関しては、各々の言語的要素はそれなりの統一的意義を有しており、そして各言語的要素がその多義性ゆえに被るべき一定の修正は、その文脈から生じてくる。これに対して個人的な語義の場合、逆の関係が生じる。個性の統一性は明らかに個々の言葉に付着しているのではなく、むしろあらゆる記念碑的著作物においてあくまでも同一である。それゆえ個性の統一性は全体の連関のなかに、つまり構成の仕方 (Compositionsweise) のなかに、浮かび上がらざるを得ない。これに対して個々の言語的要素の選択は、一定の修正を表現するものであり、かかる修正のなかで個性が表現される。そうであるとすれば、個人的解釈の課題は、構成の仕方から個性を規定することであり、そしてそこからその次に、個々の言語的要素の選択をその個人的意義にし

たがって解明することである。

1. 構成の仕方から個性を規定すること

ひとは文法的解釈を哲学的文法学の普遍の原則からではなく、ただ具体的な語法からのみ行うことができるように、個人的解釈もまた普遍的な心理学的法則からは行われ得ない。ひとは、例えば分類することによっては、つまり経験の心理学において、さまざまな気質や性情などを検討して、そのなかのどれが特定の個人にあてはまるかを見るようなやり方では、個性を見出すことはできない。心理学は一般的な分類項目を作り上げることしかできない。しかし個性は徹底的に生き生きしたもの、具体的なもの、積極的なものであり、これに対して例の図式は消極的であるにすぎず、つまり個性そのものから抽象化された一般的な抽象物にすぎない。そこからわたしは個人的解釈を——シュライアーマッハー^{シュエマーダ}が行っているように——心理学的解釈 (die psychologische [Auslegung])¹ と名づけることを避ける

¹ シュライアーマッハーの手書きの遺稿と筆記された講義に基づいて、フリードリヒ・リュッケによって編集された『解釈学と批判——とくに新約聖書に關係して——』*Hermeneutik und Kritik mit besonderer Beziehung auf das Neue Testament*(Berlin: bei G. Reimer, 1838)では、解釈学の第二部が「心理学的解釈」(die psychologische Auslegung)となっているが、リュッケ自身も脚注で注意を喚起しており(同143頁、注2)、またハインツ・キンメルレが独自の調査研究で再確認してみせたように、シュライアーマッハーは手書きの遺稿においては、その部分を「技術的解釈」(die technische Interpretation)と名づけている。Fr.D.E. Schleiermacher, *Hermeneutik*, nach den Handschriften neu herausgegeben und eingeleitet von Heinz Kimmerle (Heidelberg: Carl Winter Universitätsverlag, 1959), S. 107.

シュライアーマッハーの解釈学理論の発展において、「技術的解釈」と「心理学的解釈」がどのような関係になっているかは、より慎重な検討を要するが、ペークがここでシュライアーマッハーの「心理学的解釈」に言及し、しかもみずからはそのような呼称を好まず、むしろ「個人的解釈学」(die individuelle Auslegung)と名づけていることは注目に値する。

のであるが、それはこの名称があまりにも広範だからである。いろいろな言葉の根本的意義が定義づけて捉えることのできない直観であるように、個人的な文体もまた概念によっては完全に特徴づけることはできない。そうではなく、それは解釈学によって直観の仕方そのものとして具象的に再生され得るものである。

個人的な文体は、精神が自由に活動できればできるほど、ますますくつきりと浮かび上がるものであり、それゆえそれは模倣や外的強制によって曇らされる。したがって、それは個性が道を切り開く勇気と力とを、つまり〔独特の〕性格 (Charakter) を開示する。いかなる性格ももたない人は、いかなる独自の文体ももたない。例えばキケロ的な文体で書くように要求してきた、精神を欠いた文法家たちは、そのことによって個人的な文体をもたず書くべきだと要求したのである。もし何の特異性ももたずにキケロ的に書くとするれば、〔独特の〕性格をもたないまづい書き方にならざるを得ないということを、彼らは理解しなかったのである。このような指図はまだ発達した性格をもたない子どもにとっては良くて、大人の場合にはそのような書き方はひどくいやなものである。ひとは誰に対してもその上着を脱いで着替えるように要求はしない。しかし他人の文体で書くためには、ひとはみずからの上着だけでなく、みずからの魂までも脱ぎ捨てて、別のものと取りかえなければならないであろう。このことは幸いにも可能なことではない。そして例の文法家たちは、キケロ的な文体ということで、キケロから抽出された表現の仕方の図式を考えたにすぎない。彼らはキケロから一つの文体の骨格の標本を作ったにすぎない。これに対して真の解釈は、その文体のなかに生き生きとした個性を見出そうと欲する。

ひとは一つの言葉の根本的意義を、語源論 (Etymologie) によって、つまり〔語の〕根源へと遡源することによって、見出す。したがって、個人的な文体を規定するためには、同様に、ひとはこの文体の根源へと遡源しなければならない。しかしこの根源は国民的な文体 (der nationale Stil) である。あらゆる教養ある国民は、発話においても芸術においても、国民の性格に対応した表現の仕方をもっているが、この表現の仕方は同様に、

それが外来的なものの模倣や外的強制によって阻まれなければ阻まれないほど、ますます際立っているものである。いかなる性格ももたない国民はまたいかなる文体ももたない。例えば、ドイツ国民は〔独特の〕性格をもたないわけではない。しかしその性格は、さながら多くの性格の集合のごとく、さまざまな形式の多様性において現象化している。それゆえ、ドイツ国民はまた独特な文体の多様性を発展させてきたのであるが、一方フランスにおいてはとうの昔に真に国民的な文体が生み出されている。フランス的な文体は、もともと絶対主義のもとで、完全に宮廷風の会話調に倣って作られたもので、したがってまた、そのなかで深遠な思想を根本的に討議することができるためには、あまりにも軽やかすぎる。しかしフランス的な文体は発話の自由によって丈夫にされたが、一方今世紀前半におけるドイツ的な文体は、外来的なものの模倣は別にしても、自由さの欠如によって脆弱になり、その結果哲学的・詩的な誇張表現や揶揄のなかに自己を見失ってしまった。あらゆる作家の仕事に検閲官が関与するほどに自由が非常に制限されところでは、文体は失われてしまう。検閲官の鋏で切られることを恐れざるを得ないところでは、検察官はうろつかなくてもすでにその仕事に関与しているのである。けれども、単に発話の自由だけでなく、それあればこそ国民が〔独特の〕性格を獲得することができる自由一般が、国民的な文体の発展を促進するのである。それゆえ、国民がいろいろな部族や小国家へと分裂していた状態がそれを許したかぎりにおいて、古典古代においては国民的な文体が力強く発展させられた。ギリシアの国民的な文体は統一的ではなく、むしろさまざまな部族的性格の表現である。ローマの国民的な文体は本来的にはローマの支配的な都市共同体の性格をのみ表現している。個人的な文体は、大なり小なりの特有性をもって、国民的な文体から枝分かれしたものである。国民的な文体を圧倒的に代表する著作家が存在する。ラテン語にとっては、なかんずくキケロがそうした著作家に属する。彼はまさにかかる理由で、正当にも、純粋な語法の模範の役目を果たしているが、しかし同様に、文体の模範と見なすことは許されない。これに対してより強烈に刻印された個性においては、国民的な文体は

後退する。例えば、ラテン語ではタキトゥスにおいて、フランス語ではモンテスキューにおいてそうである。しかしながら、いずれにせよ文体の二つの側面は、語根の文法的意義がその派生語とそうであるように、きわめて緊密に結びついている。そしてひとが語根の意味をその派生的な形式からのみ探し出すことができるように、ある国民の文体も個人的な文体の形式を比較することによってのみ認識することができる。しかしそのような比較においては、ひとがこうした個人的な形式そのものを知っていると同時に、これをふたたび共通の国民的文体からはじめて理解しようとする、ということが前提される。なぜなら、比較それ自体は純粋な理解を与えるものではなく、批判の対象であるところの、比較される形式の関係についての判断を与えるものにすぎないからである。解釈学にとっては、比較は補助的な価値をもっているが、必ずしもあらゆる部分がすでに即自的に知られているのではない限り、容易に間違った規定へと導くものである。それは容易に一面的になり、そしてその場合、個々の部分を考量する際にも、比較された点が過度の意義を獲得する。ときにはまた、異質な性質をもったものが外的な視点からのみ比較され、それによってひとはまったく片寄った直観へと到達する。一つの例は、シュライター^[Carl Gottfried Schreiter] (『プラトンと対等たらんと努めているホラティウスと、彼のピソ父子への書簡とプラトンのパイドロスとの比較について』 *De Horatio Platonis aemulo eiusque epistolae ad Pisones cum huius Phaedro comparatione*. 4. Leipzig 1789) が提起し、アイヒシュテット^[Heinrich Karl Abraham Eichstädt, 1771-1848.] とアスト^[Anton Friedrich Ast, 1778-1841.] (『プラトンのパイドロスについて。アイヒシュテットの手簡付き』 *De Platonis Phaedro. Accessit epistola Eichstadii*. Jena 1801) によってさらに継続されたような、ホラティウスの『詩の技法』*Ars poetica*² とプラ

² これは現存しているホラティウスの文芸批評の一つで、正式には『ピソ父子への書簡』*Epistolae ad Pisones* と題されているが、一般的には『詩の技法』*Ars poetica* として知られている。成立年代は紀元前 18 年 (早ければ 19 年) と推定されている。

トンの『パイドロス』の間のナンセンスな並行関係である。個人的な文体そのものの規定にとって、それゆえ比較だけでは十分とはいえない。しかし個人的な文体の個々の面が他の手段によって認識されている場合には、おそらく比較は他の個人の文体との対立を通して、これをより明るい光のもとに置くことができ、かくして同時に、部分的には国民的な文体の析出へと導かれることができる。そのことによって、その後ふたたび他の点における、また他の著作における、個人的な文体の発見に成功するであろう。そのような仕方では国民的な文体からあらゆる言語的作品の個人的な文体が近似的に導出される。これが文学史の基礎である。文学史がより発達すればするほど、個人的解釈はそれゆえより完璧に成功するであろう。

しかし文学史においては、個人的な文体は、著作家が執筆するジャンル(Gattung)の文体とつねに緊密にむすびついて現れる。なぜなら、あらゆる発話のジャンルは、あらゆる芸術と同様、それに特有の文体をもっているからである。そして実際個人的な文体を比較する際、ひとは同一のジャンルの言語的著作から出発しなければならない。ジャンルは目的とそこから帰結する思想傾向との共通性に基づいている。個性はつねに一定の目的の方向において現れるので、目的の共通性は個々人の最も強烈な団結を形づくり、そして個々人の一致と相違はまさに共通の目標に関して示されることになる。ジャンルの文体はそれゆえ、個人的な文体がそこから際立って見えるところの、基礎である。両者はしばしば容易に取り違えられる。著作家の虚栄心は往々にして自分自身のやり方を過度に主張し、それをジャンルの性格だと言おうと努める。通常は追従して模倣する者たちが次にそうした著作家たちに従い、その結果個人的な文体がジャンルの文体として現れる。そのようにしてわれわれの間では、ひどい運命悲劇の産物が長きにわたって権利を主張してきた。それは数人の粗野な頭脳によって作り出されたものであるが、その文体が悲劇の文体と見なされたのである。

ヴィーランド [Christoph Martin Wieland, 1733-1813. ドイツの詩人。レッシング、クロプシュトックと並んで、ドイツ古典主義文学の前期を代表し、そのロココ風の詩文は優雅かつ軽快である。] は自分の小説の語調をジャンルの性格と見なした。そして彼は自分のやり方を過大評価したので、例えばホラティウスは自分自身のやり方でのみやってい

たのに、これをジャンルに属するものと考えることによって、ホラティウスを水で薄めてしまった。逆にひとはしばしばジャンルの性格を個人的な文体と取り違えてきた。例えば、ひとはドリス風の叙情詩一般の性格に属する多くのものを、ピンダロスの特徴と見なしてきた。これにしたがえば、個人的解釈は種類の解釈³を前提しているが、他方で個性がそれへと帰着する目的と方向は、個性そのものの本質からはじめて理解され得る、つまり種類の解釈は個人的解釈に基づいている。このような循環はここでは、ジャンルを規定している目的は個性を完全に知らなくても部分的に認識され得るということによって、近似的 (approximativ) な仕方で解決される。ジャンルについてのこの不完全な理解は、その後ふたたび個性の個々の側面を解明し、それによって種類の解釈は新しい基礎を得ることになるが、そのようにしてこの二種類の解釈はさらに相互的にかみ合う。しかし作品そのものから個人的な文体を規定することが、つねに出発点を形づくらなければならない。

もし一人の著者に関して複数の作品が存在しているとすれば、ひとは著者の個性をその作品の総体において直観しなければならないであろう。だがその作品の各々は異なった条件下における著者の性格を表している。その各々において、著者の性格は、そのようにしてすべてのものから全体像を獲得するために、作品が構成されるその瞬間において理解されるべきで

³ この文脈から明かなように、「種類の解釈」(die generische Auslegung)と呼ばれているものは、「発話のジャンル」(Redegattungen)に着目した解釈である。より詳しい説明は、後続の「Ⅳ. 種類の解釈」で与えられるが、いづれにせよ、「種類の」(generisch)という形容詞は、「種属」を表すラテン語の *genus* に由来している。「文芸作品の様式上の種類・種別」を意味するフランス語の「ジャンル」(*genre*)もこのラテン語に由来するが、このフランス語に相当するのがドイツ語の *Gattung* である。それゆえ、*generisch* は *Gattung* と密接に関連しており、ある意味でその形容詞形と見なすことができる。したがって、「種類の解釈」は「ジャンルの解釈」と言い換えられてもよいであろう。

ある。かくしてひとはつねに個々の作品の分析へと赴くよう命じられている。言語作品というものは、プラトンが述べているように(『パイドロス』264 C)⁴、ひとつの有機体(ein Organismus)である。だが有機体においては、全体は部分に優先している。芸術家は事実みずからの作品の全体を、未発展なものであっても統一的な直観として、まず精神的な目の前に有しており、次にかかる直観からあらゆる部分が、全体を構成する部分として形成されるのである。作家の個性はこのような作品の統一性のなかに集中しており、それゆえ個人的な解釈によって、そこにおいて理解され、広範囲な区分において追求されなければならない。ところで、作品の統一性はどこに存しているのだろうか。作品の統一性は何よりもまずその作品のなかで叙述される対象の統一性に存している。フェイディアス [Pheidias, c.490-432 BC. 古代アテネにおける最も偉大な芸術家の一人。彫刻家、建築家、画家として名声を誇った。パルテノン神殿の本尊アテナ・パルテノス像は彼の代表作。]の念頭には、オリュポスのゼウスの根本思想および統一性として、外的に叙述されるものの分割されない内的な直観が、つまりその本質におけるゼウス自身の個性が浮かんでいたように、あらゆる言語作品も統一的に限界づけられた素材に関係してい

⁴ 「パイドロス この私が、彼のことをそんなに正確に見分けることができると考えてくださるとは、あなたも親切なかたですね。

ソクラテス しかし、少なくともこのことだけは、君は肯定してくれるだろうと思うのだが、話というものは、すべてどのような話でも、ちょうど一つの生きもののように、それ自身で独立に自分の一つの身体を持ったものとして組み立てられていなければならない。したがって、頭が欠けていてもいけないし、足が欠けていてもいけない。ちゃんと真ん中も端もあって、それらがお互いどうし、また全体との関係において、ぴったりと適合して書かれていなければならないのだ。

パイドロス 誰もそのことを否定できないでしょう。

ソクラテス それなら、君の親友が作った話が、この原理にかなっているかないかを、しらべてみたまえ。そうすれば君は、あの話が、プリュギアの人ミダスのために書かれていたと言われる碑銘と、少しも違わないのを発見するだろう。『プラトン全集』第5巻、鈴木照雄・藤沢令夫訳『饗宴・パイドロス』(岩波書店、1974年)、227-228頁。

る。しかし作品において追求される目的——そしてこれは、同様に、統一[・]的[・]なものであるが——には、客観的な内容が役立っている。ところで、客観[・]的な統一性の中に入って来るであろう、大量のあらゆる事実や思想のなかから、その目的に合致しているものだけが強調されることによって、あるいはもし可能であれば、客観的には二三のものがその目的への方向を獲得することによって、主観[・]的な統一性が成立し、これが必然的に思想[・]の統一性となるのである。客観的な統一性が主観的な統一性によって支配されることによって、そして前者は後者の土台を形づくるにすぎないということによって、両者は主観的なものと客観的なもののごとくに、完全に一体となって分離されない実質[・]的な統一性を形づくる。やがてここから同時に形式的な統一性、すなわちこの素材が外的にも一つの全体へと形成されている、そのやり方が生じてくる。形式的な統一性は、作品を構成するさまざまな部分が、順々にあの実質的な統一性に奉仕するかたちで、論理的および修辞学的に結合している点に存している。自明のことながら、実質的な統一性と形式的な統一性は、形式と実質一般と同じように、引き裂くことのできない全体を形づくっており、そしてこの全体の組成のなかに個人的な文体が開示されなければならないが、個人的な文体はここでは、当然、国民的な文体ならびにジャンルの文体とすでに撚り合わされている。形式的統一性と実質的統一性のこの関係を、ゲオルク・ルートヴィヒ・ヴァル[・]ヒ [Georg Ludwig Walch, 1785-1838. ドイツの文献学者。有名なイエナの神学者 Johann Georg Walch] (1693-1775) の孫。タキウスの研究にいそしみ、Aglicola (1828) と Germania (1829) を編纂した。] の「タキトゥスのアグリコラあるいは古代の伝記の芸術形式について」(彼が編集した『アグリコラ』⁵の版、ベルリン、1828年)は、非常に啓発的な仕方[・]で論じた。この論文を飾り立てているお粗末な論争や、粗悪な揶揄や、余計な学識を拭い去れば、その中にはタキトゥスの『アグリコラ』の文体の特徴が見事

⁵ 娘婿であったタキトゥスが描いた義父アグリコラの伝記。ちなみに、アグリコラ (Gnaeus Julius Agricola, 40-93) は元老院貴族階級に属していたローマの将軍。61年軍団参謀としてブリタニアに赴き、77/78年にブリタニア駐屯軍総司令官となった。彼は公正かつ穏和人柄で、属州民の信頼を勝ち得た。

に示されている。そして歴史的対象と根本思想とのなかに存する実質的統一性が、形式的統一性といかにして区別されるかが、これによって説明される。一切のものを規定する契機は明らかに目的の統一性である。ところで、目的は種類の解釈によって確定されるのであるから、種類の解釈は第一歩からして個人的解釈のなかに食い込んでいる。

フリードリヒ・アウグスト・ヴォルフは、彼のホメロス序説において、ギリシア人は言語作品においてはのちになってようやく全体を理解することを学んだ、と主張している⁶。だがこれは全く間違っている。むしろ近代人がのちになってようやく古代人の作品を全体として理解することを学んだのである。われわれの時代でもなおひとは一般的には、ギリシア文学の傑作はつねに一つの全体的目的を追求している、との確信には決して到達していない。そこで例えばモルゲンシュテルン [Johann Carl Simon Morgenstern, 1770-1832. ドイツの文献学者。F.A. ヴォルフの弟子。『教育小説』(Bildungsroman) という用語を造語したことも知られる。] は、プラトンの『国家』に関する著書 (『プラトンの国家についての三つの注釈』*De Platonis republica commentationes tres*. ハレ, 1794年) において、この作品に対して一つの主要目的、つまり正義を叙述することと、一つの副次的目的、国家を叙述することを仮定し、それ以外にもそこにさらに複数の副次的な探求を見出している。まことにシュライアーマッハーですら、『国家』の翻訳への序論において、ソクラテスを二つの頭をもったヤヌスと名づけている。というのも彼は国家篇において、みずからこの作品の目的は正義を叙述することであると言っているのに、『ティマエオス』でこれをさらに追求して、国家についての論議を目的と認知したからである。さて、その作品に統一性がない著作家が存在することは否定できない。そしてその場合、ひとは可能なかぎりこうした作品を説明するかもしれないし、それはまた困難なことではないであろう。なぜなら、個別的なものはすべて個々別々に存在し、連関なしに存在して

⁶ Cf. Friedrich August Wolf, *Friedrich August Wolfs Prolegomena zu Homer*. Ins Deutsch übertraght von Hermann Manchau (Leipzig: Reclam, 1902).

いるからである。しかし真の芸術家にとっては、書物を書くときにはすべて統一的な目的がある。したがって、悲劇が行為の統一性を超えていくときには、間違いであると見なされる。古代人たちはそのことをよく自覚していた。そして見たところ統一性を損なっているような場合、そうになっている非常によくわかる理由は、つねにより多くの部分の高次の連関のうちに存在している。われわれはそれゆえ古典的書物の二つの目的を認めはしない。そうではなく、プラトンの場合にこのことを仮定するような解釈はまだ不完全である、と主張するものである。ひとはここで著者の思想体系を知ることによってのみ、正しいものを見出すことができる。例えばひとがプラトンの『カルミデス』から、彼にとって政治は「正しさについての知」(ἐπιστήμη δικαίου)⁷以外の何物でもないということを知っていれば、二つの目的は一つの目的へと解消し、そして目的としての正義へと導かれる構成は、そのときには爾余の情報の反証とはならない。プロクロスはこのことを『プラトンの国家篇註解』*Plat. Rempubl.*⁸ p. 351 (Bas. Ausg. v. 1534)において見事に指し示している。プラトンの国家は実現された正義以外の何物でもない。あるいはプロクロスが非常に見事に述べているように、「正義が政治を特徴づける」(τὴν πολιτικὴν χαρακτηρίζει ἡ δικαιοσύνη*)のである。もしある作品に幾つかの副次的目的が存在するとすれば、それらは主目的に根ざしていなければならない。統一性のない作品は、その一部がヴィーナスを、他の一部がアルテミスを表している立像に似ている。

一つの作品の統一性と個々の点での個人的な語法との間には、あらゆる著作家において一種の思想的結合が存する。古代人はこれをイデア(ἰδέα),

⁷ 「カルミデス」170 B, 『プラトン全集』第7巻, 北嶋美雪・山野耕治・生島幹三訳『テアゲス・カルミデス・ラケス・リュシス』(岩波書店, 1975年), 86頁。

⁸ 略さずにスペルアウトすれば、正式な書名は *In Platonis Rempublicam commentarii* である。

* 『小品集』第四巻, 327頁に所収の1829年の「読書カタログについてのプロオイミオン」を参照のこと。

つまり作家の文体形式と呼んでいる。言語はたしかに本来的には観念を——しかしながら直観において——表現するものにすぎず、実質的には表示の手段にすぎない。言語は客観的であるので、それはわれわれの感覚の直接的な状態を純粋に伝えはしない。そうではなく言語がそれを伝えるのは、われわれがこの感覚そのものをふたたび外化して、客観的素材へと形成するときに限られている。作家が主観的であればあるほど、彼はますますこのようにするであろう。そしてそのためにいまや彼は、作品の構成を段階的に意のままにする。まず沢山の思想が主観性を指し示すためだけに用いられる。観念を客観的に叙述するためには、あれこれと語られることは決して必要ではなく、単純な客観的な表現の代わりに、書き換えや敷衍が立ち現れる。そして単純な主観的な叙述の手段として織り込まれる副次的思想が存在する。ひとはそれゆえ、各々の作家がこれに関してどのような態度をとっているのか、あるいはその作家は叙述されるべき対象をあたかもむき出しに披露するのか、それともみずからの主観性によってそれを覆っているのか、ということを取りわけ考察しなければならない。ひとはしばしば叙述的な思想にすぎないものを、本質的かつ客観的なものと見なす。そこからひどく混乱した理解が生じるが、作家がこうした混乱に多くの機会を提供するときには、彼は最終的に解釈者によって混乱していると宣告される。とくに深遠な内容を湛えた作品について、浅薄な解釈者が判断を下すと、こうしたことが起こる。プラトンに関するマイナー・ス [Christoph Meiners, 1747-1810. ドイツの哲学者。人類の多元発生説を支持し、またカントに反対する立場をとったことでも知られる。] の判断はそのようなものである、と宣告されるべきである。一般的に個人的な解釈に関して、新約聖書はプラトンと多くの類似性を有しているが、同様なことが新約聖書についても言える。まことにプラトンはまさに彼の個性によってキリスト教の先駆者である。思想を主観的な言葉で表すことに属しているのは、新約聖書においてもプラトンにおけるのと同じくらい頻繁に見出される適応 (Accommodation)⁹ ということである。しかしこの適応ということは、い

⁹ 「適応」(Akkommodation; ラテン語の accommodatio に由来。Anpassung

ろいろな人々が考えるように、ひとがみずから取り違えて認識した、いろいろな誤謬を使用することではなく、新しい真理を何か古いものに結びつけることに存している。この古いものは全体としては間違っているが、にもかかわらず真なる一面があり、ひとはいまその一面を際立たせるのである。それゆえ、適応ということはしばしば現実的な議論であるように見える。このことを理解しないと、あらゆることは倒錯したかたちで現れる。プラトンはしばしば詩人の詩句を間違った仕方⁹で解釈することによって適応したが、そうした詩句はしかるのちに自由に取り扱われ、より高次の意味を獲得した。かくして『国家』第一巻や『プロタゴラス』では、叙述のためだけにシモニデスに結びつけられる¹⁰。プルタルコス [Plutarchos, c.46-125, 古代ギリシアの哲学者・著

ともいう)とは、逐語靈感説的な聖書理解を背景に、聖書に関する神学的教説のなかで主張されだしたもので、聖霊による人間的言語の使用を人間的知性への神的適応と見なした。この理論は18世紀後半にさらに一般化されて、イエスや使徒たちの宣教に含まれる神話論的表象を、その当時の人々に理解できるようにするために取られた、教育的措置ないし手段と見なす学説へと導かれた。

¹⁰ 「シモニデスは、テタッリアの人スコパスに献じた詩において、こう言っている —

まことにすぐれた人になることはむずかしい

手足 心が完全で 非の打ちどころのない人になることは

君はこの歌を知っているかね。それとも、全部言ってきたせよか?」(『プラトン全集』第8巻, 山本光雄・藤沢令夫訳『エウテュデモス・プロタゴラス』[岩波書店, 1975年, 177頁])。

「『してみると、「ほんとうのことを語り、あずかったものを返す」ということは、〈正しき〉(正義)の規定としては通用しないことになります』

すると、ポレマルコスがばくの言葉を引き取って言った、

『ところが大いに通用するのですよ、ソクラテス、いやしくも、シモニデスの言うことを、いくらかでも信じなければならぬとすればですね』(中略)

『さあそれでは』とばくは言った、『議論の相続人である君よ、教えてくれたまえ。〈正義〉についての正しい説だと君が主張するのは、シモニデスのどのような言葉なのかね?』

述家。プラトン哲学の流れを汲み、博覧・多識で知られ、ローマ・アレクサン・ドリア・ギリシアなどを講義しつつ遍歴した。主著は『英雄伝』(対比列伝)。¹¹」は別の意味で最も多く適応を用いる。彼は古い箇所に結びつくが、しかし彼はそれを織り込んでしばしば改変する。適応においては、基礎に据えられている他人の見解についての解釈が正しいか、あるいはそうでないかは、どうでもよいことである。著者は自由な遊戯によって間違った解釈を与えることができる。古代人は出来の悪い解釈者であるという見解は、かかる事実についての誤解に起因する。だがむしろそのような場合には、彼らにとって正しい解釈はまったく問題ではなかった。彼らはしばしば意図的に問題を歪曲し、つねに啓発的な叙述を引き起こすものを込めて解釈する。ギリシアの詩歌においては、語源的な遊戯もこの種の適応に属している。比較(Vergleichungen)、修辭学的な比喩(rhetorischen Figuren)、さらに省略三段論法(Enthymem)は、主観的叙述のもう一つの手段を形づくる。最後のものは、いかなる種類のものであることを欲しようと、つねに主観的叙述という目的しかもっていない。エンテュメーマ(Ενθύμημα)¹¹とは、ひとがいわば肝に銘ずべき

『「それぞれ人に借りているものを返すのが、正しいということだ」というのです』とポレマルコスが答えた、『私としては、これは立派な言葉だと思いますがね』

『なるほど』とぼくは言った、『相手がシモニデスともなれば、疑念をいだくわけにもなかなかいくまいね。なにしろ、賢くて神のような人だから。しかしその言葉の意味は、いったい、どういうことなのだろう。君には、ポレマルコス、たぶんわかっているのだろうが、ぼくにはどうもわからない。だって、彼の言う意味が、さっきわれわれが言っていたようなこと——つまり、誰かから何かをあずかっていて、返還を求められる場合、相手が正気でないのにそれを返すということ——ではないのは、明らかだからね。しかし〈あずかっているもの〉とは、〈借りているもの〉のことにほかならない。これはたしかだろうね?』(『プラトン全集』第11巻、田中美知太郎・藤沢令夫訳『クレイトポン・国家』〔岩波書店、1976年、33-34頁〕)。

¹¹ ἐνθυμέομαι 〔①心にとめる、肝に銘ずる、熟慮する②推論する〕という動詞から派生した名詞で、ここでは論理学における「弁論術的推論」を言い表す。厳密な三段論法と違って、前提となる命題が確定的ではなく蓋然的であり、

命題を意味しており、そのなかにすでに彼の主観的本性が存している。それは主観的な推論の方式、対人的論証 (argumentatio ad hominem) である。したがって、それは三段論法における完成を許さない。それが三段論法的に明確であり得ないということは、その本性に存している。それゆえ、青年時代のデモステネス [Demosthenes, 384-322 BC. アテナイの政治家・雄弁家。マケドニアのフィリッポス2世に対する攻撃演説『第一フィリッポス論』で頭角を現し、やがてアテナイを主導する雄弁家となった。『栄冠論』(前 330) はアッティカの雄弁術の粋と見なされている。] の場合がそうであったように、いつ如何なる時でも啓発的である多くの省略三段論法によって、叙述は混乱させられる。省略三段論法の一例は、キケロの『ミロー弁護』*pro Milone* c. 29 の「それゆえ、諸君は、自分たちの力で生き返らせることができると仮に考えていても、そんなことは望みもしないような者の死に仇を討つために坐っている」(Eius igitur mortis sedetis ultores cuius vitam si putetis per vos restitui posse, nolitis---)¹² である。これは三段論法的な形式で構想されてはいないが、独自の魅力と鋭敏さをもつ、反対からの論証である。別の例としては、実際にはローマに対して何かを企てようとしなかったのに、ロードス島がローマ人に悪事を意図したとの理由で、ローマ人が彼らを攻撃しようとしたとき、ロードス島の住民はカトー [Marcus Porcius Cato Censorius (Cato Major), 234-149 BC. ローマの政治家・学者。財務官(前 204)、法務官(前 198)、執政官(前 195) を歴任。ヘレニズムの華美な風潮が流行するなかで、古代ローマの質実剛健な生活への復帰を唱道した。] によって弁護された。そのときカトーは、「彼らが単に行おうと欲したとわれわれが言うところのことを、われわれがまず先んじて実行しようとするのだろうか」(Quod illo dicimus voluisse facere, id nos priores facere occupabimus?) (Gellius VII, 3), と言った。ティロ [Tiro, Marcus Tullius. 紀元前1世紀のローマの自由人。キケロの私設秘書で、ティロニアン・システムと呼ばれる速記法を古代ローマに導入したと言われている。] は省略三段論法を非難した¹³、ひとはもちろんここで「われわれはたしかに実行す

しかもこの前提がしばしば省略されるために、一般的に「省略三段論法」と呼ばれている。

¹² キケロー、山沢孝至訳「ミロー弁護」、『キケロー選集2』(岩波書店、2000年)、402頁所収。

¹³ 参考までに原文を引用しておけば、“‘Hoc,’ inquit [Tiro], ‘enthymema nequam et vitiosum est.’” (英訳: “‘This,’ says Tiro, ‘is a worthless and faulty

るであろう」(occupabimus certe)と答えることができるであろう。それにもかかわらず、多くの省略三段論法はそうしたものである。

しかし個人的な構成は言語のすべての要素を支配しており、そしてそのことによって言語作品にそれに特有の外的形式を与える。それは特別な種類の結合によって実質的要素を、つまり言語における最も客観的なものを、みずからのものとする。より形式的な要素、つまり不変化詞に対しては、それはほとんど無制限な権力を有している。それゆえひとは、ある著作家が反省とその表現である不変化詞によって〔文章を〕結合しているのか、あるいは単に互いに並べることによってのみであるのか、彼が選ぶイメージと表現は、強烈であるかそれとも穏和であるか、柔らかであるかそれとも激しいか、彼のやり方は弁証法的であるかそれとも教条主義的であるか、等々を調べなければならない。これらすべてのうちに表現の倫理的相違が存しているが、この相違は個性にその起源を有している。だが結合の仕方をその特質において把握するためには、簡潔であるとか、冗長であるとか、周期的であるかそうでないかとか、不変化詞に富むかその反対か、等々といったような、図式や抽象的命名に満足することは許されない。ひとは直観されるべき具体的統一性へと入っていかなければならない。当然のことながら、ひとはこの統一性に概念に即して可能なかぎり広範囲にわたって入り込まなければならない。但し、それによって考察が抽象的になってはならない。多くのことが概念に即して個的なもののなかへと通じている。このようにして、ひとは例えば、トウキユディデス、タキトゥス、およびセネカの簡潔さをよく区別し、特徴づけることができる。トウキユディデスには飛躍がない。彼の場合にはすべては不変化詞によって論理的に厳格に結び合わされており、主観的なところは一切ない。彼は同時に一定の硬

argument….”) The Loeb Classical Library 200, *The Attic Nights of Aulus Gellius*, with an English translation by John C. Rolfe (London: William Heinemann Ltd, Cambridge, Mass.* Harvard University Press, 1960), pp. 20-21.

さをもっているが、それは〔思想の〕結びつきが厳格すぎて、それぞれを仲介する中間的思想を欠いているからである。だが、それぞれの表現は深い。タキトゥスには力強い簡潔さがあるが、しかしながら彼は純粹ではなく、感傷的で主観的である。この関係でいえば、彼の書き方の先駆者としてはすでにサルスティウス

[Sallust, ラテン語のフルネームは Gaius Sallustius Crispus, 86-34 B.C. ローマの歴史家・政治家。護民官 (52 B.C.)。カイサル派の政治家として活躍し、ローマに有名な庭園を築いた。主著「歴史」Historiae は失われたが、カティリーナの反乱を扱ったもの (Bellum Catilinae) がある。しかしとヌミディア王ユグルタとローマの戦いを主題としたもの (Bellum Iugurthinum) は残っている。]

がある時代の内容を一つの文に凝縮するとき、そこからその時代の叙述はキケロのような人によってさらに展開され得るのであるが、セネカはキケロ的な時代の内容を多くの別々の、並列的な文に分解する。キケロにおいては、個々の切り石は接合剤もかすがいもなく、しかも結合されているが、セネカにおいては、スエトニウスの『カリグラ』*Caligula* 53 におけるカリグラの判断によれば、それは「石灰のまざらない砂」(arena sine calce)¹⁴ である。これはエルネステイが、セネカはキケロと比べて全然簡潔ではない、と主張するとき、きわめて正しく考慮していたところである。

フロント [Marcus Cornelius Fronto, c.100-c.166. ローマの雄弁家。マルクス・アウレリウスの教師。彼の著作のほとんどは失われたが、若干の書簡がその思想の一端を物語っている。彼は当時の人々から、キケロを除けば雄弁家中の第一人者と見なされていた。] [pag. 156Nab.¹⁵] はセネカについて次のように述べている。すな

わち、「わたしは彼が思想に満ちている、まこと思想にあふれている人であることを知っていないわけではない。しかし彼の思想はちょこまかと小走りになり、ギャロップでの全速力で走る姿をどこでも見ないし、戦う姿もどこでも見ない。……彼は金言というよりはむしろ洒落をつくり出す」(neque ignoro copiosum sentiis et redundantem hominem esse, verum sententias eius tolutares video nusquam quadripedo concito cursu tene-

¹⁴ スエトニウス、国原吉之助訳『ローマ皇帝伝』(岩波文庫、2007年)、67頁。訳者の説明によれば、「石灰のまざらない砂」とは、「石灰のまざらない砂は接合剤とならぬように、セネカの文体は建築材(文章)を積み重ねても強さを欠いているという意味」ではないかとのことである(同342頁)。

¹⁵ この略号は、オランダの文献学者 Samuel Adrianus Naber によって校訂・編集された Marcus Cornelius Fronto, *Epistulae* (Leipzig, 1867)の156頁という意味。

re, nusquam pugnare... dicteria potius eum, quam dicta continere)¹⁶。

特有の時代構造と語構造は、著作家の書き方にとってとくに弁別的である。なぜなら、ここにはリズムやメロディーの響きにおける言語の音楽的要素がさらに考察の対象になるからであるが、当然のことながら、この要素は詩的な作品の場合には、詩行を構成する個人的なやり方においてとくに際立ってくるからである。最後に、言語は感情を表現するための独自の要素を確立してきた。これがつまり間投詞というもので、これの援用はしばしば個性の重要な判断基準である。これについては、ひとはますます厳密になる分析を通して、きわめて微妙な相違を発見し、そのようにして個性全体を近似的に認識するにいたる。しかしながら、ひとはつねに全体から出発しなければならず、個から出発してはならない。文体は、むしろすべての人において等しいような構成要素ではなく、全体のうちにその原理を有している。

しかし個人的な語法を探究する際に、国民的な文体やジャンルの文体に属しているものは分離しなければならないということが、もう一度思い起こされなければならない。叙情詩家の場合には、思想の結びつきはすでにジャンルによればまったく自由である。彼は飛躍しながら運動する。すなわち、連関は内的・主観的なものにすぎないので、あらゆる結びつきは自由奔放な幻想のなせる業である。それゆえ、このような特質は、例えば、ピンダロスの流儀ではなく、一般的に叙情詩的な特徴である。したがって、

¹⁶ ベークのテキストでは引用文の最後の語は, continere となっているが, 正しくは confingere である。Cf. The Loeb Classical Library 113, *Marcus Cornelius Fronto II*, ed. C.R. Haines (London: William Heinemann Ltd, Cambridge; Mass.: Harvard University Press, 1960), p. 102。したがって, ここでは confingere に差し替えて訳しておいた。なお, dicterium の複数形の dicteria という語は, dico [言う, 話す] とギリシア語の ἔριον [(墓として築いた9塚) に基づいて造られた合成語で, a joke, witticism の意味であるという。Cf. P.G.W. Glare (Ed.). *Oxford Latin Dictionary* (Oxford: Clarendon Press, 2004), p. 538。

これは悲劇の合唱隊にも同様に見出される。詩歌や修辞学や哲学的散文などのような、幾多のジャンルは一定の言葉を排除する。あるいはそれらは特別な種類の語順、構造、数、そしてとりわけ詩的な作品の場合には、確固たるリズムと詩行構造とをもっている。さらに著作家の文体は、その著作家が書いている時代によって規定されている。厳格な文体、単純に美しい文体、優雅な文体の相違は、非常にしばしば時代によっている。たしかにひとは、個人の個性が時代を支配し、時代がこれに従うのであって、個性が時代に従うのではない、とすることができるであろうが、しかしこのような言い分のうちには誤りがある。すなわち、もしひとが同じ時代にさまざまなジャンルを考察し、すべてのうちに同じ文体を見出すとすれば、この文体はその時代に属するものであって、個人に属するものではないか、あるいは少なくとも必ずしも個人に属するものではない。芸術においてはいたるところで、つまり建築、彫刻、音楽、詩歌、弁論術、それどころか歴史的ならびに哲学的な叙述において、厳格な様式が出発点を形づくる。アイスキュロスの悲劇は崇高な様式をもっているが、その時代の叙情詩、つまりピンダロスの叙情詩は同じ様式を示しており、ミルティアデス [Miltiades, c.530-489 BC. ギリシアの政治家・軍人。アテナイ貴族の出。前490年のマラトンの戦いで決定的な勝利を得た。トラキアの王女との間に生まれた子が有名な政治家キモンである。]、キモン [Kimon, c.512-449 BC. アテナイの将軍・政治家。ミルティアデスの子で、前478年将軍に選ばれてデロス同盟結成の際にアリスティデスを助けた。]、テミストクレス [Themistokles, c.528-462 BC. アテナイの政治家・将軍。名門の出身で、紀元前493年に第一執政官になり、海軍拡張に尽力した。] のような人の、派手ではないが力強い雄弁さも、同じ様式を示している。彫刻も絵画も疑いなく同じ様式を示している。ヘロドトスは例外をなす。彼の叙述はその時代に基づいてはいない。ペリクレス [Perikles, c.495-429 BC. 全盛期のアテナイを代表する政治家。トゥキュディデスの陶片追放によって指導権を確立し、以後死ぬまで毎年ストラテゴス (将軍) に選ばれた。] の時代はより穏健で感じがよくなり、ソポクレス、トゥキュディデス、リュシ阿斯 [Lysias, c.450-c.380 BC. ギリシアの演説代作者。財産を没収され (前404)、生活のために法廷演説代作者となり、200篇以上の演説を書いたといわれるが、現存するものは30余篇のみ。] 等のように、優雅さと崇高さの両方を兼ね備えている。このあとにエウリピデス、イソクラテス、クセノフオン等とともに、柔和さの時代が起こる。一つの時代の個々の個人は、もちろん規定的な仕方での時代に影響を及ぼすので、そこでその時代の性格はふたたび、ある程度までは一定の人物の性格と同一視される。恣意的なものであれ不随意的なものであれ、一定の性格を設定する芸術学派の概念

は、この一定の人物の性格に基づいている。そうはいつでもここでも、部分的にはふたたび国民性が、とくに書き手が属している民族ないし種族の特性を通して、介入する。言語一般の、あるいは何らかの学派やジャンルの明瞭な特徴しかもっていないところの、特性を欠いた、したがって〔独自の〕文体を欠いた著作家も存在する。その場合、こうした著作家たちを特殊な個性と見なす必要はさらさらない。彼らは自立的な意義をもたない大衆に属する。

個性を解釈するための資料として使えるものの量が多くなればなるほど、個性はますます明瞭に直観されるであろうが、それは個性の本質が、言葉の根本直観と同様、多面的な考察によって捉えられるからである。それゆえ、著作家の作品が多ければ多いほど、また同じジャンルのそして同じ時代の作品が多ければ多いほど、作業はますます確かなものになる。しかし資料が不足している場合には、すなわち一人の著作について、それどころか一つのジャンルについて、一冊の書物しか存在しない場合には、同じジャンルないし似通った幾つかのジャンルにおける表現の類似性から出発する、^{アナロジー}類比の力を借りなければならない。とはいえ、ここでは最大限の注意と修練のみが誤った処置から守ってくれる。

2. 個々の言語的要素についての個人的解釈

ひとは全体の構成に基づいて個別的な部分を解釈することを、なるほど論理的連関に基づく解釈と呼んできた。もちろん思考は論理的な標準法則に向けられており、そして言語的作品において表現されるような、思想的複合体の連関はこの法則によって条件づけられている。しかしこのことはあらゆる個人において一様にそうである。にもかかわらず、個々人は非常にまちまちに思考し、その場合また彼らはしばしば多様な仕方でも論理的法則に抵触する。それゆえ、もしひとが思想連関のなかに論理的側面しか考慮しないとすれば、ひとは爾余の個性的契機を考慮しないのであるから、一方では理解することが少なすぎることになる。しかし他方では、論理的連関が存在しないところで、論理的連関を仮定するのであるから、ひとは

また往々にして理解しすぎることになる。個人的解釈の主要な課題は個性を規定することに存しているが、この主要な課題が解決されているかぎり、ひとはそのような一面的なやり方から守られている。個性から個々の言語的要素を解釈することは、遡及的適用にすぎず、それは容易に明かになる。もしひとが個性を生き生きとした直観へともたらしたとすれば、ひとはおのずからすべての個別的なものをその直観の光のもとで見るであろう。ひとはそのときに、言語的要素の選択が話し手の性格と雰囲気によってどのように制約されているかを、あるいは——すでに示したように（前述の109頁¹⁷を参照のこと）——文法的意義そのものが何によって修正されうるのかを知るのであり、そして特殊な現実的關係がどこで仮定されなければならないのか、それゆえ歴史的解釈がどこで適用可能であるのか（前述の114頁¹⁸を参照のこと）を認識するのである。その場合、個人的解釈の課題の中に存している循環がいかに解決され得るかが示される（前述の125頁¹⁹を参照のこと）。つまり個性は言語作品そのものから突きとめられているが、しかし言語作品は個性からはじめて解釈され得るということである。にもかかわらず、客観的な語彙は個人的解釈なしでは完全に不明瞭である。ひとはそこから全体の連関を、著作の統一性が明かとなり、そしてそこから構成の仕方が若干の關係にしたがって明かとなるかぎりにおいて、把握することができる。そのときそれによって個々の箇所における理解の意義がふたたび説明され、そしてそのようにして個々の箇所における理解の間隙を補填することによって、ひとはそこからふたたび作品の新しい側面を理解するのである。そのようにして全体と個々の部分はあとからあとから相互に規定し合うのである。原理の請求〔不当前提〕(petitio principii)は、ひとが個人的解釈からはじめて文法的に明瞭になる一つの箇所から、

¹⁷ 拙論「アウグスト・ベーク『文献学的な諸学問のエンチクロペディーならびに方法論』— 翻訳・注解 (その3) —」、『人文論集』第42号、259頁参照。

¹⁸ 同264-265頁参照。

¹⁹ 本篇1-2頁。

個性を規定しようと欲するときのみ、入り込んでくる。なぜなら、ひとはそのときに、そこから見出そうと欲するところのものを、その箇所の中へと含ませて解釈するからである。例えば、 $\dot{\text{タ}}\dot{\text{キ}}\dot{\text{ト}}\dot{\text{ウ}}\dot{\text{ス}}$ の皮肉っぽく感傷的な性格は、多くの箇所から認識され得るが、ひとは他の作品においては即自的には異なった解釈を許すような他の箇所を、次にそこから解釈するのである。だがしかし、もしひとがそこから文法的には即自的に不明確な箇所を解明するために——だがその箇所はまた別様にも解釈され得るであろうが——、他の作品や他の著作家において、同一の性格やあるいは同一の雰囲気的前提しようと欲するのであれば、このことは実際には原理の請求〔不当前提〕ということになるであろう。 $\text{G}\cdot\dot{\text{ヘ}}\dot{\text{ル}}\dot{\text{マ}}\dot{\text{ン}}$ による $\dot{\text{ピ}}\dot{\text{ン}}\dot{\text{ダ}}\dot{\text{ロ}}\dot{\text{ス}}$ の解釈のなかには、そのような原理の請求〔不当前提〕が幾重にも見出される。彼は与えられた状況や詩人の特徴にしたがえばきわめて多様な仕方を取り扱われ得るような素材において、詩人が何を語らなければならなかったかをあらかじめ規定し、そして次にこれを解釈の根拠と見なすのである。ひとはそのようにもっぱら仮說的に行動することはできるが、しかしひとはその場合、その仮説を他の仕方ですべきとめられた作品の性格に照らして検証しなければならない*。しかしながら、もしひとが解釈の循環を運良くまた回避したとしても、言語的作品のあらゆる個々の要素を個性的に理解することには決して成功しないであろう。ここでの課題は明らかに、個性があらゆる個々の場合に、あらゆる力の方向において、またあらゆる外的な前提のもとで、どのように自己を開示しなければならないかを理解する、という課題である。しかしひとは個性の力を完全には知り得ず、むしろ作

* 『小品集』第七巻, 426 頁参照。〔ベークはこの箇所以下のように述べている。「解釈の業務はむしろ、所与のものを分析し、そこから全体の基礎になっている思想を見出すところに存する。もしひとがこの点に関して思い違いをしているか、あるいは著者〔G・ヘルマン〕が述べているように、間違った前提のせいでそもそもの初めから道に迷っているとすれば、全体の理解はもちろん損なわれる。」〕

品中でのその働きにしたがって近似的に測定することしかできない。このような働きの現状、つまりいろいろなものを条件づけている歴史的諸関係は、同様に完全には決して知られていない。そして個性にその方向性を与えている目的も、作品のなかに現前する生の断片から近似的にのみ規定され得る。もし課題が完全に解決され得るのであれば、ひとは作品全体を再生産できなければならないであろうし、しかも意識と反省とをもってでなければならないであろう。これが個性的な理解の最終的な試験となるであろう。しかしこのためには、ひとが他人の個性のうちに完全に入り込むことが必要となり、これは近似的にしか達成され得ない。

*本稿は、平成 21-23 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般））を交付されて行なっている研究「解釈学と歴史主義 —— A・ベークと J・G・ドロイゼンについての比較研究 ——」の成果の一部である。